特別展示
「日本とトルコ－国交樹立九〇年－」について

外務省では、年に一回、外交史料館別館展示室において、外務省周年事業や外交史上の重要事件・人物にちなんだ特別展示を開催している。

二〇一四年（平成二六年）は、日本とトルコの国交樹立九〇年を記念して、在日トルコ共和国大使館との共催により、日本とトルコの交流を外交史料で振り返る特別展示を開催した（開催期間：二〇一四年五月一三日～二〇一四年九月一二日）。

日本とトルコは、第一次世界大戦後に連合国とトルコが結んだ平和条約である「ローザンヌ条約」の発効によって一九二四年八月六日に国交を樹立した（日本は連合国の一員として条約に署名）。本展示では、同条約の認証謄本や、初代在日トルコ大使が昭和天皇に捧呈した信任状（トルコ共和国初代大統領ケマル・パシャの署名入り）、日本とトルコが結んだ最初の二国間条約である「日本国トルコ国間通商航海条約」のトルコ側批准書など日本とトルコの国交樹立に関わる史料を中心に展示を行った。

また、在日トルコ共和国大使館より、トルココーヒーのセットやタイルの飾り皿などトルコの代表的な工芸品を出展していただき、地図や写真と合わせてトルコの文化等を紹介した。

なお、本展示開催にあたり、東京大学名誉教授鈴木董先生にご協力いただいた。七月一一日には当館講堂において関連行事として講演会を開催し、鈴木先生に「日本とトルコで大使館が開かれるまで―近代外交システムの拡大と日本とトルコの常駐在外公館網の発展―」と題し、講演をしていただいた。当日は、約八〇名が参加し、大変盛況であった。ここに記してお礼申し上げたい。

本特別展示の展示史料解説は以下の通り。なお、同解説は外交史料館ホームページ内のコンテンツ「特別展示・企画展示アーカイブス」にも掲載されている。

○外交史料館ＨＰ「特別展示・企画展示アーカイブス」
http://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/honsho/shiryo/archive.html

「日本とトルコ―国交樹立九〇年―」〈展示史料解説〉

はじめに―日本・トルコ国交樹立九〇年―

一九二三年（大正一二年）、スイスにおいて日本を含む第一次世界大戦の連合国とトルコとの間でローザンヌ条約が調印されました。この条約により、トルコ共和国はオスマン帝国に代わる主権国家として国際的に認知され、翌一九二四年八月六日、同条約の発効をもって、日本とトルコは国交を樹立しました。その後、両国は政治・経済・文化交流など、あらゆる分野で着実に関係を発展させてきました。

本年は日本とトルコの国交樹立から九〇年にあたります。外交史料館と在日トルコ共和国大使館が主催する今回の特別展示では、国交樹立に関する条約書等を中心としながら、そこに至るまでの両国の交流、また国交樹立後の両国親善関係の深まり等、近代における日本とトルコの交流の歴史を外交史料等によりご紹介します。

本展示が日本とトルコの相互理解を促進し、友好関係発展の一助となれば幸いです。

Ⅰ　エルトゥールル号遭難事件
―日本・トルコ交流のはじまり―

一八八七年（明治二〇年）、小松宮彰仁親王（こまつのみやあきひと）殿下はヨーロッパ視察旅行の帰途、イスタンブールをご訪問し、オスマン・トルコ皇帝（スルタン）アブデュル・ハミト二世に謁見しました。この時の歓待に感謝し、翌年、明治天皇は皇帝に親書と漆器を贈られました。一八八九年七月、アブデュル・ハミト二世は、日本に答礼の特派使節を派遣しました。オスマン・パシャ（海軍少将）を代表として軍艦エルトゥールル号に乗ってやってきた使節団はトルコから日本に派遣された最初の使節でした。

一八九〇年六月、同使節団は横浜に到着、オスマン・パシャは明治天皇に拝謁し、オスマン帝国の最高勲章を捧呈しました。使節は約三カ月間、日本に滞在し、トルコに帰還する途中の九月一六日夜、和歌山県の樫野崎灯台付近で台風による強風と高波の影響を受け座礁、沈没しました。

樫野崎灯台がある大島村（現在の串本町）では、生存者の保護と遺体収容のため、村を挙げて懸命に対応にあたりました。また、日本海軍も知らせを受けると、軍艦八重山を派遣し、村民と協力して遭難者の埋葬を行いました。

救出された六九名の乗組員は、神戸で治療を受け、その後、明治天皇の命により軍艦金剛、比叡によって、丁重にトルコへ送還されました。両軍艦は一八九一年一月二日、イスタンブールに到着し、歓迎を受け、両艦長には皇帝から勲章が授与されました。これに対し、後日、明治天皇からもトルコ海軍少将等へ勲章が授与されました。

また、約六〇〇名の死者を出した本事件は日本国内で大きく報道さ

れ、義捐金も集められました。このような日本国民の対応はトルコ人の心を打ったとされ、極めて痛ましい事件ではありましたが、本事件は両国の友好の原点とされています。

展示史料1　一八八八年（明治二一年）五月一〇日

明治天皇からアブデュル・ハミト二世宛親書の写

展示史料2　一八九〇年（明治二三年）

トルコ使節に対する接遇の方針

宮内省作成文書。横浜上陸の際の礼砲、使節の鹿鳴館滞在、謁見の式次などが記載されている。

展示史料3　一八九一年（明治二四年）五月二六日

トルコ海軍少将らへの叙勲上奏につき照会

樺山資紀海軍大臣が青木周蔵外務大臣に送った公信。叙勲の対象人物がリストアップされている。

Ⅱ　二〇世紀初頭の日本・トルコ関係

一九〇四年（明治三七年）から一九〇五年にかけて、日本とロシアは満州と韓国の権益をめぐって戦争を行いました。バルカン情勢とロシアの黒海艦隊の動静を把握するため、外務省はトルコ国内で情報収集を行っていました。

牧野伸顕在オーストリア公使を通じて小村寿太郎外務大臣に寄せられた情報によると、トルコ国民は一般に日本に同情的であり、トルコ軍の参謀司令官も日本軍を賞賛し、日本の勝利を予見していました。しかし、皇帝アブデュル・ハミト二世は、ロシアに不利な新聞報道を規制しました。皇帝は、ロシアが新興国日本に敗れた場合、トルコを日本の例にならって改革しようとする運動が起きることを恐れたようです。

その後、一九〇八年にマケドニア駐留軍が蜂起し、一八七八年に停止された憲法（ミドハト憲法）を復活させ、皇帝の専制政治を改めさせました（青年トルコ革命）。そして翌年、アブデュル・ハミト二世は国会の議決により廃位となりました。

他方、日本政府はトルコとの国交を樹立すべく、日露戦争中も交渉を行っていました。一九〇九年に小村寿太郎外務大臣が内田康哉在オーストリア大使に送った訓令には、バルカン地域諸国の中では、トルコとの国交樹立を第一に希望していることが記されています。交渉に際し、当初、日本は西洋列国と同様の内容でトルコとの条約締結を試みましたが、日本が領事裁判権を有することをトルコが認めなかったため、日本側は領事裁判権には触れず、外交関係の開始のみを目的とする宣言書の調印を提案しました。しかし、領事裁判権の撤廃に苦しんでいたトルコ側は、領事裁判権に関して満足できない条約は新たに結ばないという方針をとり、さらに一九一一年には、トルコとイタリアの間で戦争が勃発したため、交渉は不成立に終わりました。

この頃、インドのカルカッタ総領事館に勤務していた平田知夫総領

事代理から、転任前にペルシアやトルコを調査したいとの上申がありました。その上申書を見ると、トルコがイギリス、ロシア、ドイツといった列国の重要な活動舞台となっていることや、「日露戦争における日本の勝利が、同じ東洋人として彼らに感動を与え、政治的革命が起こった」という見方が有力となっており、今後の日本との関係において好影響を与える可能性があることなどが記されていて、当時のトルコに対する日本の外交官の認識の一端がうかがえます。

この後、平田は一九一二年五月にオーストリア大使館勤務の名義で、イスタンブールに常駐し、バルカン情勢を報告することを命ぜられ、現地を視察しましたが、同年一〇月からバルカン戦争が起こるなど情勢が大きく変化したため、結局駐在は見送られました。

展示史料4　一九〇四年（明治三七年）八月八日
日露戦争に対するトルコ国内での反響

展示史料5　一九〇九年（明治四二年）三月一日
日土条約締結交渉方針に関する訓令

展示史料6　一九一〇年（明治四三年）八月五日
ペルシア及びトルコ方面への視察旅行に関する申請

Ⅲ　トルコ共和国の成立と日土国交樹立

一九一二年から始まったバルカン戦争にトルコ軍は敗北し、オスマン帝国によるバルカン支配は終わりを迎えました。これ以後、バルカンは民族国家の割拠する地となり、まさに「ヨーロッパの火薬庫」となりました。一九一四年、セルビア人民族主義者によるオーストリア皇太子夫妻暗殺をきっかけとして、第一次世界大戦が勃発すると、トルコは同盟国側（ドイツ側）に立ち参戦しました。トルコ軍はロシア軍、イギリス軍、フランス軍と各地で戦闘を交えましたが、敗北を重ね、一九一八年一〇月三〇日、休戦条約に署名しました。同年一一月一三日には、連合国軍が首都イスタンブールを占領し、一九二〇年八月一〇日には講和条約として、連合国とオスマン帝国政府の間でセーブル条約が結ばれました（日本も連合国の一員として条約に調印）。条約は、ボスポラス・ダーダネルス両海峡の非武装化と国際管理、アルメニアの独立、ギリシャへの領土割譲、英仏によるアラブ地域の分割と委任統治、連合国による財政管理・軍備制限・領事裁判権の復活、仏伊の勢力圏設定など、オスマン帝国にとって大変厳しい内容で、これによりオスマン帝国は多くの領土を失いました。

本条約を受諾したオスマン帝国政府に対し、トルコ国内では批判が高まりました。軍人のムスタファ・ケマル・パシャを中心として、連合国の領土分割に反対すべく抵抗運動が組織され、一九二〇年、アンカラに「革命政権」が誕生しました。その後、ケマルは、連合国の意を受けてアナトリアに侵攻してきたギリシャ軍を追い返し、さらに進軍を続けました。ケマルの勢力を無視できなくなった連合国側は、セーブル条約に代わる新しい講和条約を締結するため、イスタンブールの

オスマン帝国政府（旧政府）とケマル率いるアンカラ政府（新政府）の両者を講和会議に招請しましたが、ここに至り、アンカラ政府は、旧政府の存在を否定し、スルタン制廃止、オスマン帝国滅亡を決議しました。

こうして、一九二二年一一月二〇日からスイスのローザンヌで講和会議が開かれ、翌一九二三年七月二四日、トルコは連合国と対等な立場で新たな条約（ローザンヌ条約）を結ぶことに成功しました。

展示史料7　一九二〇年（大正九年）八月一〇日
同盟国とトルコとの平和条約（セーブル条約）認証謄本

展示史料8　一九二二年（大正一一年）一一月四日
アンカラ政府（新政府）によるスルタン廃止、オスマン帝国政府滅亡の宣言

イスタンブール在勤の内田定槌公使が内田康哉外務大臣にアンカラ政府の決議を伝えた報告文書。

展示史料9　一九二二年（大正一一年）一一月一四日
ローザンヌ会議に対する帝国政府方針（閣議決定）

展示史料10-1　一九二三年（大正一二年）七月二四日調印
トルコ国との平和条約（ローザンヌ条約）認証謄本

展示史料10-2　一九二四年（大正一三年）八月六日批准書寄託
トルコ国との平和条約（ローザンヌ条約）批准寄託調書認証謄本

◇大使館の開設

国交を樹立した翌年の一九二五年三月二三日、日本はトルコに大使館を開設しました。同年一一月一七日には、初代在トルコ大使小幡酉吉がイスタンブールに到着し、同月二三日、ケマル・パシャ大統領に信任状を捧呈しました。小幡はケマルについて「眼光炯々人ヲ凝視スル様ハ一種ノ凄味ヲ帯フ」と描写しています。ケマルは日本最初の全権大使を迎えることができて大いに満足であり、将来両国親善のために最善の努力を惜しまないと述べました。

＊炯々＝鋭く光る様

一方、一九二五年七月七日、東京にトルコ大使館が開設されました（フルスィ・ファド・ベイが臨時代理大使として着任）。そして、一九二九年（昭和四年）四月一六日には、初代トルコ大使としてジェヴァド・ベイが日本に赴任しました。

また、ローザンヌ会議で結ばれた通商条約の期間満了にともない、一九三〇年一〇月一一日には、日本国トルコ国間通商航海条約が結ばれました。本条約は、日本とトルコの二国間で結ばれた最初の条約です。

なお、この時期のトルコ大使館には、後に首相となる芦田均が一等書記官として勤めていました（一九二八年一〇月から一九二九年一一月までは臨時代理大使）。芦田はボスポラス・ダーダネルス両海峡に関して『君府海峡通航制度史論』という著書を著し、この研究によっ

て東京帝国大学から法学博士の学位を授与されています。

＊君府＝コンスタンティノープル＝イスタンブール

展示史料11　一九二五年（大正一四年）一二月一日

信任状捧呈式に関する報告

小幡酉吉在トルコ大使がケマル・パシャ大統領に信任状を捧呈した際の様子を報告した文書。

展示史料12　一九二九年（昭和四年）四月一六日

ジェヴァド・ベイ在本邦特命全権大使に対する信任状

ケマル・パシャ大統領から昭和天皇に宛てられた信任状。大統領の署名が見られる。

展示史料13-1　一九三〇年（昭和五年）九月二日

日本国トルコ国間通商航海条約締結のための全権委任状

展示史料13-2　一九三〇年（昭和五年）一〇月一一日調印

一九三四年（昭和九年）三月二〇日批准書交換

日本国トルコ国間通商航海条約 トルコ側批准書

Ⅳ　交流の深まり

―一九二〇年代から三〇年代―

大使館が設置された一九二五年、大阪に日土貿易協会が設立されました。そして翌年には、東京に日土協会が設立されました。いずれも、日本とトルコの親善を図ることが目的とされています。日土協会の初代会長には、一九二一年から二三年に日本政府外交代表者としてトルコに在勤した内田定槌が就任しました。さらに、一九二九年には高松宮宣仁（たかまつのみやのぶひと）親王殿下が総裁に就任されました。

一九三一年には高松宮殿下がトルコをご訪問されました。吉田（よしだ）伊三郎（いさぶろう）在トルコ大使からの報告によると、ケマル大統領は高松宮殿下との会見時にフランス語で話しかけ、両国関係の親交増進を力説し、日土協会総裁を務めている高松宮殿下の努力に謝意を示したそうです。また、トルコ政府は、財政難の中、高松宮殿下のために特別列車や旅館を提供し、大統領、首相、外相がかわるがわる宴会を開催し、熱心に歓迎したとの記録が残っています。

同年一一月には、東京日本橋三越において、日土協会主催、外務省・商工省・拓務省後援で「土耳其国情展覧会」が開催されました。展覧会には、イスタンブール商工会議所から出品されたトルコ名産の葉煙草、生糸、干しぶどうや、日本国内の名士秘蔵の美術工芸染織品等が陳列されたほか、高松宮殿下がトルコを訪問された際に購入された写真・絵画等が展示されました。また、トルコの風俗等を示すためのパノラマ・ジオラマなども設置され、両国の親善や理解を深める機会となりました。

展示史料14-1　一九二六年（大正一五年）六月一六日

日土協会創立総会

太田政弘警視総監が幣原喜重郎外務大臣宛に送った公信。六月一五日に開催された日土協会創立総会の様子を伝えた文書。

展示史料14-2 一九二六年（大正一五年）～一九二八年（昭和三年）頃

日土協会関係者記念写真

展示史料15 一九三一年（昭和六年）二月四日

高松宮殿下のトルコご訪問

吉田伊三郎在トルコ大使が幣原喜重郎外務大臣に送った報告書。

展示史料16 一九三一年（昭和六年）一一月

土耳其国情展覧会記念写真帖

◇エルトゥールル号遭難事件慰霊碑の建立

一九三六年にはトルコ共和国によって、エルトゥールル号事件犠牲者の墓地に新たな慰霊碑が建設されることになりました。犠牲者の遺体は、事故当時、樫野崎灯台と遭難現場である「船甲羅」の中間地点に埋葬され、一八九一年に墓碑が建てられました。その後、大島村では節目ごとに慰霊祭が行われていましたが、一九二八年八月には大島村と日土貿易協会が、フルスィ・フアド・ベイ在日トルコ臨時代理大使を招いて追悼祭を行い、その際に追悼碑の建立が決定されました。建立された追悼碑は翌一九二九年四月五日に竣工し、同年六月三日には、この地に昭和天皇が行幸されました。この行幸はトルコ国内でも報道され、このような日本側の対応を受け、一九三六年にトルコ共和国によって新たな慰霊碑が建設されることになりました。同年一〇月二二日に行われた定礎式には、ヒュスレヴ・ゲレデ在日トルコ大使、内田定槌日土協会会長ら関係者のほか、多くの地元住民が参列しました。

新慰霊碑はトルコ共和国が和歌山県に委嘱し、旧墓碑を埋め込んだものが建設されました。除幕式は、遭難事件五〇周年追悼式（二年繰上げて実施）とあわせて一九三七年六月三日に盛大に挙行されました。

本慰霊碑は、その後も地元の小学生や関係者によって清掃・管理されており、現在でも五年に一度慰霊祭が行われています。また、一九七四年には、トルコとの国際的な友愛精神を広く伝える施設として串本町がトルコ記念館を設立し、エルトゥールル号事件当時の様子を今に伝えています。さらに近年、エルトゥールル号の遭難海域で日本とトルコの合同チームにより発掘調査が行われるなど、エルトゥールル号事件を通した両国の交流は現在に至るまで続いています。

おわりに

以上、エルトゥールル号遭難事件から始まり、九〇年前の国交樹立、その後の民間も含めた交流の深まりなど、トルコと日本の交流の歴史を史料を通して見てきました。両国の関係は、その後、第二次世界大戦による一時的な断絶があったものの、現在に至るまで着実に発展しています。

エルトゥールル号遭難事件では日本側がトルコ人の救出にあたりま

したが、これとは逆に、イラン・イラク戦争が続いていた一九八五年、イラクの空爆を目前にイランの首都テヘランに取り残されていた日本人約二一五人が、トルコ航空機によって奇跡的に救出されるという出来事もありました。

また、最近では、二〇一一年（平成二三年）の東日本大震災の際に、三二名の支援・救助チームがトルコから派遣されました。同チームは、宮城県利府町を拠点として、同県の多賀城市、石巻市雄勝町および七ヶ浜町にて、行方不明者の捜索活動等に従事し、三月二〇日から四月八日まで、約三週間もの長期にわたり支援活動を行いました（支援・救助チームとしては最長期間）。これは、一九九九年のトルコ北西部地震で日本が迅速かつ包括的に支援を行ったことへの恩返しという気持ちもあったそうです。その後、同年一〇月二三日にトルコ東部ヴァン県を震源とする大地震が発生した際には、日本からは、緊急援助物資（テント五〇〇張）を供与するとともに、トルコ政府が計画した仮設住宅への支援のため一〇〇〇万ドルの緊急無償資金協力を行いました。

日本とトルコは一万一〇〇〇キロを隔てたアジア大陸の東と西の端に位置しています。しかし、両国民は互いの国民のことを誇りに思える歴史を共有しています。両国の交流の歴史を紐解き、そこに思いを馳せる時、心を通わせた近しい存在として互いの存在を感じられるのではないでしょうか。本展示をご覧いただくことで、両国の友情、相互理解、交流がより一層深まるきっかけとなれば幸いです。

トルコ共和国について

トルコ共和国は、三方を黒海、エーゲ海、地中海に囲まれており、古くから「東西文明の十字路」として栄えた場所にあります。国土は日本の約二倍（約七八万平方キロメートル）、人口は七二〇六万人（二〇〇五年、国家統計庁推計）で中東地域を代表する大国の一つです。ヨーロッパ、アジア、中東、アフリカに近接している地理的特性から、トルコ人は目や髪の色など実に多様性に富んでいます。また、トルコは世界有数の農業国でもあり、ヘーゼルナッツ、いちじく、あんず、さくらんぼの生産量は世界一を誇っています。また、小麦、砂糖、いも、豆類なども有数の生産量を誇っています。

国民のほとんどはイスラム教徒ですが、歴史的には初期キリスト教布教の地でもあり、国内にはキリスト教ゆかりの神聖な場所も数多く残されています。ユニークな景観の世界遺産「カッパドキア」は、初期キリスト教の教会や住居などとして使われていました。また、イスタンブールにある世界遺産「アヤ・ソフィア」は、もともと東ローマ帝国時代にキリスト教の大聖堂として建築された建物ですが、後世にイスラム教の尖塔が増築されてモスクとなりました。このようにトルコはイスラム教徒の国となった後でも、キリスト教の遺産と共存、調和する社会を築いており、ここにトルコ人の寛容さが表れています。

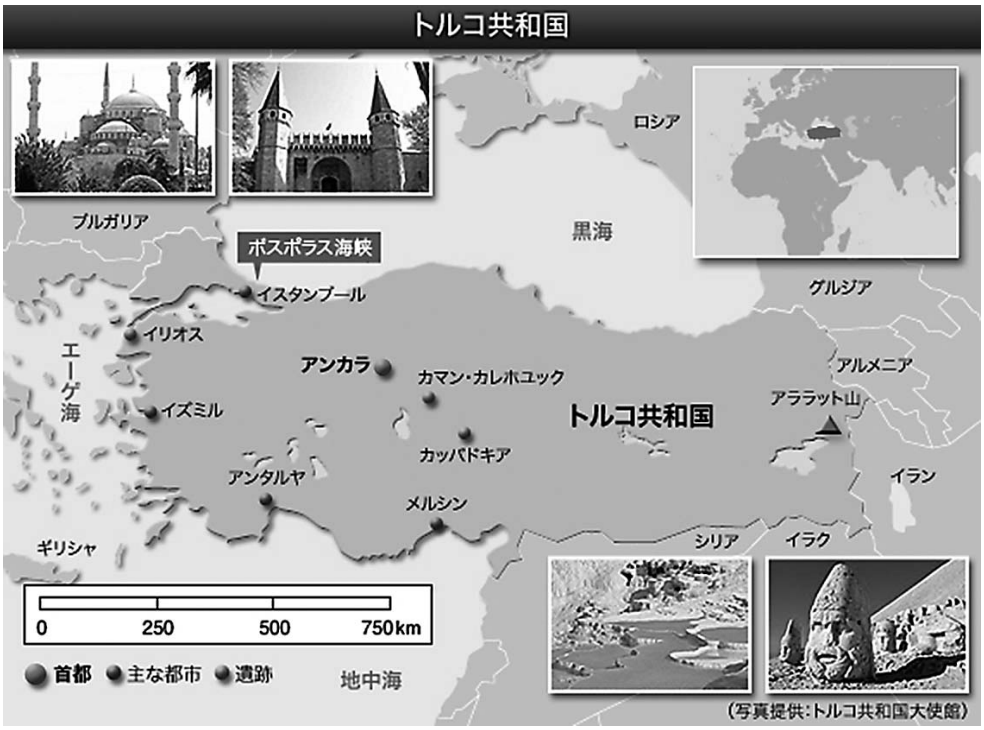
このようなトルコが今、最も国際社会の注目を集めているのが、EU（欧州連合）への加盟をめぐる問題です。トルコはイスラム社会で

唯一、ＮＡＴＯ（北大西洋条約機構）に加盟している国であり、欧米諸国との同盟関係をとても重視しています。このため、早くからヨーロッパの地域統合に強い関心を示し、一九八七年にＥＣ加盟申請、二〇〇五年からはＥＵの加盟交渉が開始されています。しかし、具体的な加盟の見通しはたっていないのが現状です。また、トルコ国内でも、ＥＵ加盟に対して慎重な意見が増えてきているとの見方もあり、まだまだ議論が続きそうです。

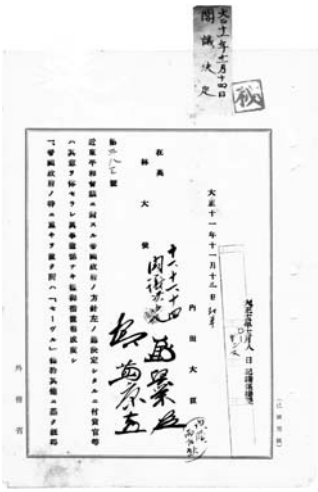
さらに、トルコは近年、ＢＲＩＣＳ（ブラジル、ロシア、インド、中国）に続く新興経済国（ＮＥＸＴ11）として注目されています。そのトルコ経済の新たな原動力となっているのが、石油と天然ガスの「エネルギー輸送」です。トルコの国内にこれらのエネルギー資源は少ないのですが、カスピ海沿岸地域を見渡せば、石油・天然ガスの一大供給地があります。それらを中継するパイプラインを国内に敷くことで、トルコは、東西南北を結ぶ巨大な「エネルギー回廊」としての役割を担うことができると考えています。

国際社会においても、トルコは重要な役割を担っています。近年では、近隣地域の安定と経済関係の強化を目指す積極外交を展開し、混乱するシリア情勢の解決に向けた積極的な関与、最大の貿易相手国ロシアとのエネルギー安全保障面を中心とした関係強化、トルコ系民族の多い中央アジア・コーカサス地域との交流などを加速度的に進めています。また、古くから異民族・異教徒に寛容でユダヤ人を受け入れてきた経緯もあり、中東和平の実現のため国際社会と協力しているほか、テロとの闘いが続くアフガニスタンやイラクにも積極的な支援を展開し、近年ではトルコ国際協力機関（ＴＩＫＡ）がアフリカなどへの開発支援を行っています。隣国イランの核開発疑惑の解決に向けても外交的な取組を行っています。

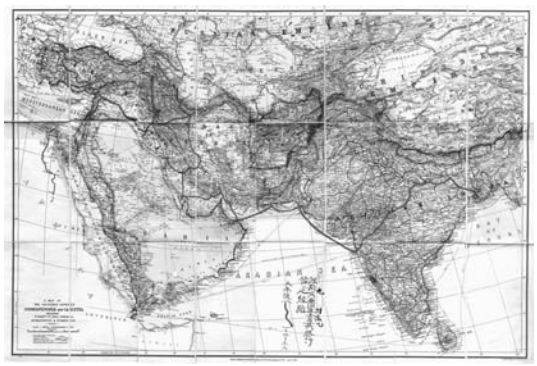
日本からは自動車産業を中心におおくの民間企業がトルコへ進出し、欧州市場向けの生産拠点としています。アジアとヨーロッパをつなぐボスポラス海峡では、地球環境にも配慮した「ボスポラス海峡横断地下鉄整備計画」が日本の国際協力で進められ、二〇一三年一〇月二九日に、安倍晋三首相らも出席し同地下鉄の開通式典が行われました。



出典：外務省ＨＰ「わかる！国際情勢「トルコという国」」

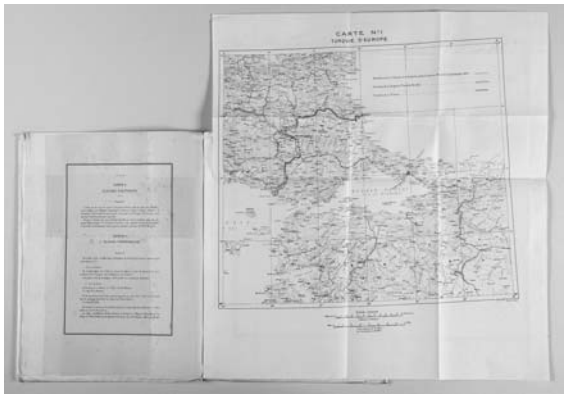


【展示史料９】
ローザンヌ会議対する帝国政府方針
（閣議決定）

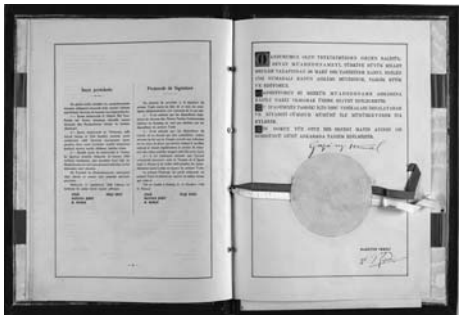


【展示史料６】
ペルシア及びトルコ方面への視察旅行に
関する申請書の添付地図

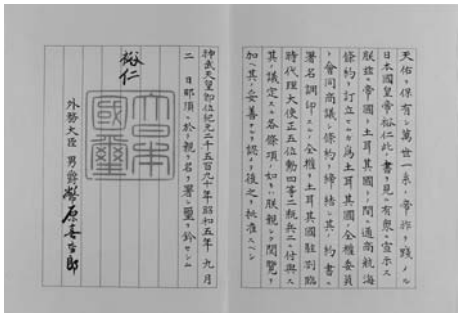
【展示史料11】
ケマル・パシャ写真
小幡大使が信任状捧呈式の報告書に添付して送ってきたもの。



【展示史料10-1】
トルコ国との平和条約（ローザンヌ条約）認証謄本



【展示史料13-2】
日本国トルコ国間通商航海条約
トルコ側批准書



【展示史料13-1】
日本国トルコ国間通商航海条約締結のための全権委任状

【展示史料16】
土耳其国情展覧会をご観覧になる高松宮殿下と同妃殿下
（『土耳其国情展覧会記念写真帖』より）

【展示史料14-2】
日土協会関係記念写真
写真左下に高松宮宣仁親王殿下のご署名が見られる。

【展示史料16】
トルコ珈琲、煙草接待所
（『土耳其国情展覧会記念写真帖』より）

【展示史料16】
パノラマ（日本軍艦比叡金剛のイスタンブール訪問）
（『土耳其国情展覧会記念写真帖』より）

関 係 年 表

和暦		西暦	日本・トルコ関係	元首	トルコ国内	日本国内、一般事項等
明治	6	1873	岩倉使節団の一等書記官・福地源一郎、イスタンブール訪問	アブデュルアズィズ		
	8	1875	寺島宗則外務卿、日本・トルコ間の国交樹立につき、三条実美太政大臣に上申			
	9	1876	中井弘在英国公使館員、国情調査のため、イスタンブールを訪問	アブデュル・ハミト2世	憲法（ミドハト憲法）発布 第一次立憲制（～78）	
	10	1877			議会開設 露土戦争（ロシアに敗北）	
	11	1878	日本軍艦・清輝、イスタンブールを親善訪問		憲法停止、議会閉鎖 サン・ステファノ条約調印 ベルリン条約調印（サン・ステファノ条約破棄）	
	14	1881	吉田正春外務省理事官、国交樹立交渉のため、イスタンブールを訪問			
	20	1887	小松宮彰仁親王・同妃両殿下、イスタンブールご訪問。スルタンに謁見			
	21	1888	明治天皇よりスルタンに親書、大勲位菊花大綬章等を贈呈			
	22	1889			「統一と進歩の委員会」結成	
	23	1890	スルタン、日本に答礼の使節派遣。オスマン・パシャ提督が明治天皇に拝謁し、オスマン帝国最高勲章を捧呈。帰国途中に和歌山県沖で遭難**（エルトゥールル号遭難事件）**			大日本帝国憲法発布
	24	1891	日本軍艦・比叡と金剛がエルトゥールル号の生存者をトルコへ送還。スルタンに謁見し、明治天皇よりの親書と贈答品を捧呈			日英通商航海条約調印 日清戦争（～95）
	25	1892	山田寅次郎が義援金を集め、トルコを訪問			日清講和条約調印
	26	1893	青木周蔵在独公使、イスタンブール訪問。国交樹立に関してスルタンと協議			
	27	1894	東伏見宮依仁親王殿下、イスタンブールご訪問。スルタンに謁見			
	37	1904				**日露戦争（～05）**
	41	1908			**青年トルコ革命（立憲制復活）** 第二次立憲制	
	44	1911		メフメト5世	伊土戦争	日米通商航海条約調印
	45	1912			第一次バルカン戦争（～13）	
大正	2	1913			第二次バルカン戦争	
	3	1914			第一次世界大戦（～18）	第一次世界大戦（～18）
	6	1917				ロシア革命
	7	1918			連合国側に降伏	
	8	1919		メフメト6世	祖国解放戦争（～22）	
	9	1920	**セーブル条約調印**		アンカラにトルコ大国民議会開設 アンカラ政府樹立 **セーブル条約調印**	国際連盟成立
	11	1922			**トルコ大国民議会、スルタン制の廃止を決議。オスマン帝国滅亡**	
	12	1923	**ローザンヌ条約調印**（セーブル条約破棄）	ケマル・パシャ	**ローザンヌ条約調印** アンカラへ遷都 **トルコ共和国成立。ケマル・パシャが大統領に就任**	関東大震災
	13	1924	**ローザンヌ条約発効により、日本・トルコ間で正式に国交樹立**		カリフ制廃止。新憲法制定	
	14	1925	**在トルコ日本国大使館、イスタンブールに開設。在日トルコ共和国大使館開設。日土貿易協会創立**			
	15	1926	**日土協会創立**			

和暦		西暦	日本・トルコ関係	元首	トルコ国内	日本国内、一般事項等
昭和	4	1929	高松宮宣仁親王殿下、日土協会総裁にご就任 日土貿易協会、エルトゥールル号遭難者墳域に追悼碑を建立。昭和天皇、行幸	ケマル・パシャ		世界恐慌
	5	1930	**日土通商航海条約調印（34批准）**			
	6	1931	高松宮・同妃両殿下、トルコご訪問。ケマル・パシャと会見			満州事変
	7	1932			国際連盟加盟	国際連盟脱退
	9	1934			ケマル・パシャにアタテュルクの称号が贈られる	
	10	1935	神戸にイスラム教寺院（モスク）完成			
	11	1936			モントルー条約調印	
	12	1937	**トルコ政府拠出金によるエルトゥールル号慰霊碑完成。除幕式と遭難50周年追悼祭（2年繰上）を同事に挙行** 在トルコ日本大使館がアンカラに移転 日土貿易協定調印			盧溝橋事件　日中戦争（～45）
	13	1938			ケマル・パシャ逝去	
	14	1939		イスメト・イノニュ		第二次世界大戦（～45）
	16	1941				太平洋戦争（～45）
	20	1945	国交断絶。在トルコ日本大使館閉鎖 トルコ、対日宣戦布告		国際連合に加盟	ポツダム宣言受諾 降伏文書調印
	26	1951	東京にトルコ総領事館開設			サンフランシスコ平和条約調印
	27	1952	在日トルコ共和国大使館再開		NATO加盟	サンフランシスコ平和条約発効
	28	1953	在トルコ日本国大使館再開 日土通商航海条約復活			
	31	1956				国際連合に加盟
	35	1960			軍による「5.27クーデター」	
	36	1961			民政移管	
	28	1963	三笠宮崇仁親王・同妃両殿下、トルコご訪問			
	39	1964	串本町とヤカケントの姉妹都市宣言			東京オリンピック開催
	40	1965	イスタンブールに日本国領事館開設（1972年に総領事館に昇格）			
	46	1971			軍による「書簡によるクーデター」	
	49	1974	串本町にトルコ記念館開設		キプロス派兵	
	55	1980			軍による「9.12クーデター」	イラン・イラク戦争（～88）
	58	1983			民政移管	
	60	1985	日本人215名、トルコ航空の救援機によりテヘランよりイスタンブールへ緊急脱出			
平成	2	1990	海部首相、トルコ訪問 オザル大統領来日。即位の礼式典に出席			
	11	1999		アブドゥッラー・ギュル	トルコ北西部地震	
	15	2003	日本におけるトルコ年			
	16	2004	エルドアン首相来日			
	17	2005			EU加盟交渉開始	
	18	2006	小泉首相、トルコ訪問			
	20	2008	ギュル大統領来日			
	21	2009	皇太子殿下、トルコご訪問			
	22	2010	トルコにおける日本年			
	23	2011			トルコ東部地震	東日本大震災
	25	2013	安倍首相、トルコ訪問（5月） 安倍首相、トルコ訪問。ボスポラス海峡横断地下鉄開通式典に出席（10月）			
	26	2014	エルドアン首相来日			